

近代女性の洋装化とファッションからみるその生き方

森井 結香

(鍛冶 宏介ゼミ)

目次

- はじめに
- 第一章 洋装化のはじまり
- 第二章 女性における洋装の広まり
- 第三章 職業婦人、モダン・ガールの実態
おわりに

はじめに

古来より人と衣服は切り離せない存在で、ファッションという文化は一人一人の個性から成るものである。本論では、「服」というカテゴリーのなかでも「洋装」に絞り、さらに近代女性のファッションに視点を置く。まず、第一章では日本人と洋装の最初の出会いからみていき、それぞれの年代ごとに洋装の需要をみていく。第二章では、一般女性たちに洋装が広まり定着するのはいつ頃なのか考察する。そして第三章では、近代といえは女性が社会に進出していく時代なので、職業婦人やモダン・ガールといった具体的な人物に焦点を当てファッションと絡めながら、彼女たちの生き方をみていきたいと思う。

ところで、何故このテーマにしたかというと、筆者自身洋装が好きで、特にそのなかでもヴィンテージファッションを好んでおり、年代物のアイテムを集めることが趣味だからである。自分が所持しているアイテムは七十年代以降のものが多く、本論で取り扱う年代とあまり関係がない

が、古い物を見ていると、ふと昔の女性のファッションが気になるときがある。このテーマを選んだのも、もともと女性史がしたいと思っており、女性史を大きな分野に選んだ理由は、日本の歴史上をみると、名前を残す女性は男性と比べて圧倒的に少ないので、女性が社会進出をしていく近代以降を中心にみていくことで、何か新しい発見ができるのではないかと思ったからである。また、明治、大正、昭和を生きた女性がどのようなファッションをしていたのか知れるいい機会だと思ったからである。

よく、ファッションの流行りはループすると言われているが、第三章でも取り扱うモダン・ガールのような退廃的文化はどうだろうか。モダン・ガールは時代の特性をよく捉えていて、断髪姿に、洋装をしてきたため、新しい女性などと言われているが、あの時代だからこそ生まれた文化だったのではないだろうかと思う。同じように考えれば、時代の特性を踏まえたうえで、これからの流行に、もしかしたらモダン・ガールのような何か新しいファッションをする女性が生まれてもおかしくないのではないかと思う。

本論ではファッション文化をみていくなかで、近代における女性の生き方を探っていく。

第一章 洋装化のはじまり

近代という時代は、生活様式が、これまでの和式から洋式に移り変わり、当時、上流階級といった一部の人々だけで行われていたものが次第

に一般市民の間でも普及していく時代である。衣・食・住は人間の生活において必要不可欠であり、その一つでもある衣服の洋装化についてみていきたい。

洋装化の歴史をみていく上で重要なのは、そもそもどのような形で日本人が洋服というものに会ったのかということである。以下、『日本洋服史』第一巻（日本図書センター、二〇一一年）を参考にしながらみていきたい。

最初の洋服の伝来というのは、天文十二年（一五四三）にポルトガル商船が薩摩の南方にある種子島に漂着したときである。十三世紀末、マルコ・ポーロが「東方見聞録」を著して以来、西欧諸国は東方に注意を向けるようになり、十五世紀末には新航路を発見し、東洋貿易に望みを持つようになった。ヴァスコ・ダ・ガマがさらに航路を東進し、インドの西海岸に到達してからは、ポルトガル人が続々と移住し、後に完全にインド・南洋地方を植民地化した。西洋人が初めて日本に來航した時のエピソードは、ポルトガルが東洋における貿易権を独占していた頃、インドの植民地を出帆して本国へ帰国の途についたポルトガル船は、途中で暴風雨に遭遇し、漂流した後、グリケストキウトほか七名のポルトガル船員が、大隅国種子島（現在の鹿児島県の大隅半島と屋久島、種子島、奄美大島などを含む西海道の一國）に漂着した。それにより洋式の鉄砲が初めて日本にもたらされるのだが、それと同時に日本人が初めて目にする物の一つに洋服が入ってくるのである。ポルトガル船の乗組員の救出にあたった日本の漁夫たちは、今まで見聞きはしていた唐人服とは違った異装の姿をみて驚いた。時の領主島津貴久の臣で薩摩藩士新納喜右衛門はこの時のことを次のように報告している。「未だ夷狄の風情を知らず。衣に於て袖は之無く、上着下穿に分つ。羽織長大なり、恰好ましからず、猶、紐を結ばず。其奇体何ぞ不審なるや。」上着とズボンにマントをはおり、日本人のような帯を結ばない服装に驚愕した。

助けられたお礼として乗組員たちは着用していた上着、チョッキ、ズボンなどを漁夫たちに贈呈していったのだ。これらの異装束を薩摩藩士南園次郎右衛門常康が綱元船屋源兵衛から譲与してもらい、鹿児島郷土伊集院兼房に献上した。この服が日本に渡來した最初の西洋服だ

といわれている¹⁾。

この最初の西洋服の渡來から近代に至るまでは、天正（一五七三～一五九三）の頃には諸大名の間で南蛮の服を真似ることが流行し、また、織田信長や豊臣秀吉も南蛮趣味で知られており、特に秀吉については大坂城の天守閣に二十近い猩々緋合羽を所有しており、ガスパル・コエリヨ神父ら一行が驚嘆したという記録が残っている（天正十四年／一五八六）。享保（一七一六～一七三六）以降は蘭学者の間で実用性（活動的）を重視して洋服を身に付けるということがされていったようである。前野良沢、杉田玄白という頃の著名な医者たちは、和服の襦袢の上に当時の洋服の上着、チョッキを着用し、ズボンを穿き、吾妻コートの形に似た袖無で折襟形のオーバーのような衣類を纏って患者に接し、外出時には革製のスリッパのような雪下駄を履いたといわれている²⁾。嘉永六年（一八五三）、アメリカ東インド艦隊司令官ペリーが軍艦四隻を率いて浦賀（現在の神奈川県横須賀市）に來航し開港を要求する。これにより、幕府の鎖國政策は終わつた。そして開港されたからの日本には欧米人が頻繁に來航するようになり、日本人は彼らのもたらす西洋文化の先進性をまざまざと見せつけられる。それは服装においても言えることで、今の時代（当時の時代）に丁髷や戦道具につかう刀や槍では世界に立ち遅れてしまうことを言う者もでてきた。今までは蘭学を学ぶ学生や医者、長崎の出島にいるオランダ人と共に生活している人々の中で模倣されていた偉人風俗は、新しい時代の服装として武士や町人など新しい思想を持った人々に、部分的ではあるが取り入れられるようになった³⁾。幕末のペリー來航はまさに洋服の歴史という視点から見ても大きな革命が起きたといえよう。

いよいよ洋服が当たり前の世の中になる時代に近づいてきたが、私たちが今当たり前のように着ている洋服は、どのように一般市民に広まったのかを次にみていきたい。

まず、男性の和装から洋装へという転換は、非常に政治的な問題であった。宮廷や公の行事においてそれぞれの地位の者がどのような服装をするべきかを定めた服制という制度が存在する。この服制には江戸時代において、公家の規定と武家の規定の二つの制度があった。公家側は



図1 戎服のイメージ（鍋島報效会所蔵）
写真は佐賀藩 11 代藩主鍋島直大（右）
佐賀新聞 LIVE (<http://www.saga-s.co.jp/articles/-/145195>) より引用

諸藩兵が俗に「戎服」（図1参照）といわれる軍服を着用し京都御所の周りを徘徊するなど、衣冠や狩衣という公家の慣習にもとづく服装が乱されることを嫌がった。「戎服」は公家から見れば野蛮な外国人が着用する服であった。明治政府の判断は二つの服制と洋服の導入の間で揺れた。洋服への転換は、外交上の必要性和洋服の機能性を根拠とし図られていくが、最大の公的な根拠としては王政復古と軍国であった。明治四年（一八七二）の「服制改むるの勅諭」では公家式の衣冠制度が中国の模倣であり、強い武力の国をつくるために服装の一新が必要であることが述べられている⁷⁾。天皇が断髪、軍服に転換したのはこうした象徴であり、男性の洋装化は政府主導のもと進められ、定着していったのである。また、女性の場合も、皇太后・皇后が眉墨、お歯黒をやめたことにより、こちらも政府主導のもと今までの眉を剃り落とし、お歯黒をつける慣習は廃止されていったが、髪型、洋装に関する着手は男性よりも遅かった。そして女性の衣服は簡単には変わらなかった。そのため女性の服装を改良・洋風化することについて、長くその是非が女性雑誌の中等などで議論やさまざまな提案が行われることとなった。次に、女性の洋装について、鹿鳴館からみていきたい。

女性の洋装と深く関わりがあるものの一つに鹿鳴館が挙げられる。鹿鳴館とは外交のための社交場でそれにまつわる華やかな欧風の衣・食・

住環境が整えられ、建物は山下町（現在の東京都日比谷公園前）に建てられた。そこでは毎週日曜日ごとに舞踏会が開かれた。明治十六年（一八八三）十一月三十日の報知新聞の「鹿鳴館開館夜会の景況」の記事によると、「午後八時半から来客がくる。数百の車馬で園内がいっぱい。お互いの挨拶が終わったあと、女子は左側の一室、男子はビリヤード室に集まる。喋ったり歩き回ったりしているうちに、奏楽が聞こえてきて、上の大きな部屋に集まってダンスをする者、それをみる者もいる状態。外では煙火で柳や花紋を描くので歓声が上がリ、ビリヤードをしている者もいる状態。午後十時に全員立食。午後十二時には終了。来客は五から六百名に達し、外国婦人はびろろど（暗い青みの緑色）のドレスが多かった。」¹⁰⁾とある。この記事から当時の鹿鳴館での人々の様子がよくわかる。外国婦人のドレスの説明は記事の中にあつたが、はたして夜会に参加する日本人の上流階級の婦人たちは、いったいどのような恰好だったのだろうか。男性は燕尾服にシルクハットが主流。一方で女性には三枚重ねの白襟に五つ紋の裾模様が多く、イブニングドレスにローブ・デコレテ（ワンピースの形で襟ぐりが大きくあいている状態）を用いる者は少なかったそうである¹¹⁾。鹿鳴館の開館がきっかけとなり、上流階級の婦人たちの間で洋服が流行する。婦人舞踏会、仮装会、慈善演芸会、洋式晩餐会など、婦人が参加できる会合が増え、それに着ていく洋服の需要が増えたため洋服屋が繁盛した¹²⁾。例えば明治十九年（一八八六）十月に白木屋呉服店（東急百貨店）に洋服部ができ、明治二十三年（一八九〇）八月五日には大民洋服店、丸善、三越により『服装雑誌』が創刊される¹³⁾。洋服の導入を視覚から訴えようとした。

鹿鳴館の洋装を詳しくみていくと、スカートの後腰をふくらますバスル・スタイル（図2参照）が基本で、ウエストをコルセットでぎゅっと締め付け、大きなフレアスカートに、鳥かごのようなシンを入れて腰を張らせ、裾を引きずって歩く格好だった。

また、明治二十年（一八九〇）前後は「改良」ということが流行し、何に関しても改良で、人種改良という言葉まで飛び出し、日本婦人に外国人と結婚して今よりすぐれた子供を産むようにとの珍説まで大真面目に考えられていたようだ¹⁴⁾。

以上のように、女性の洋装化をみていく上で必要な日本における洋服の導入の過程をみてきた。種子島にて洋服を初めて目にし、一部の人々に洋服は取り入れられるようになる。明治以降は、男性の場合、洋装化を本格的に政府主導のもと進められていくが、女性の場合は、簡単に洋装化することはなかった。しかし、この時代において女性と洋装を結び付けたのは「鹿鳴館」という存在であった。上流階級の女性に限定されるが、鹿鳴館での舞踏会以外にも、他に婦人が参加できる会が増えたため、洋服の需要が高まった。しかし、一般の女性においては当時の洋服自体が高価だったという以外にも、そもそも着ていく場所がないために、洋服の需要がなかったといえる。

第二章 女性における洋装の広まり

これまで、洋装化のはじまりを天文十二年（一五四三）のポルトガル商船の種子島漂着から明治時代における鹿鳴館洋装までを男女ともにみてきたが、第二章からは女性を中心とした洋装の広まりや普及、また、どのように定着していったのかをみていきたい。

鹿鳴館が開館されてから四年程あとのことである。明治二十年（一八八七）六月に、華族女学校は「学校在学中は必ず洋服を着用すべし」という規定を発表した。明治十九年（一八八六）から昭憲皇太后（明治



図2 バッスル・スタイル 注20 図版より引用

天皇の皇后で旧名は一条美子）は欧化政策を率先するため、洋服を自らの生活に取り入れる。それを皮切りに、宮中女官が一斉に洋服を着用したのであった。旧習を遵守する宮中でも、国際社交礼儀上、夫人同伴で洋装することが求められていたため、女子の洋装化が急増して、随時洋服着用の法令が發布されたのだ。男子の礼服については太政官布告令であったのに対し、一般女子の洋装に関しては、明治二十年（一八八七）一月に皇后陛下より「洋装奨励恩召書」が出され、女子の洋装が奨励された¹⁵。

時期が前後するが、どうやら服装そのものが洋風になるといっても、髪型が洋風に移り変わるといことの方がはやかっらしい。

明治十八年（一八八五）に軍医の渡辺鼎と東京経済雑誌の記者石川映作により、女性が伝統的な結髪をやめて、西洋風に改めることを目的として結成された「大日本婦人結髪改良東髪会（婦人東髪会）」は女性生活の近代化に大きな役割を果たした¹⁶。婦人東髪会は、「第一 我邦女子結髪は不潔汚穢にして衛生上に害あること、第二 我邦女子結髪は不経済にして且交際に妨あること」¹⁷を日本髪の大デメリットとして指摘した。わかりやすく訳してみると、「第一に日本髪は不便で窮屈で苦痛である。（つまり、非常に重たいので頭痛の原因になることが苦痛）第二に日本髪は月に数回しか洗えないので不潔で通気性が良くないので衛生上、害がある。第三に日本髪は洗髪したあと、毎回結んでもらうため、そのためのお金がかかり、経済的に悪い」となる。束髪は香油を使って手軽に結えるだけではなく、乱暴な動きをしても髪が乱れないメリットがあることから、女学生、女教員、看護師など、洋装をはじめようとする人たちの間に急速的に普及した。またこの波は都会から地方都市にまで及んだ¹⁸。明治の末期には洋風の束髪が主流になったようである。『女学雑誌』には次のように述べられている。「明治十七、八年の頃から、西洋風が盛んになるにつれて束髪が行はれ、近來は非常な勢を以て流行して居ります」¹⁹。婦人東髪会結成から比較的短期間に婦人の西洋風束髪が定着したのは、洋服に合う髪型ではあるが、以前の日本髪と違い、衛生面の改良の大きさや、結んでもらう手間が無くなり、時間の短縮にもつ

ながら、何よりも自分で簡単に色々な髪型が結えるというところが今まで苦労をしていた日本の女性に好評だったのではないだろうかと思う。

日本髪は元結（髪を束ねる際の紐）を使って髪を束ねて、前髪、鬢（びん／サイドの部分）、髷（たば／襟足部分）をとり、それを集めて頭上に髷を作る髪型である。崩れやすいので、髷付け油（蠟と油を固く練り合わせたもの）をつけて固めていたという。（参考：日本大百科全書）このように結うのに手間がかかるため、月に一、二回程度しか洗髪できないので大変不衛生であった。

明治十八年（一八八五）に「大日本婦人結髪改良東髪会（婦人東髪会）」が発足され、日本各地の女性に束髪の広まりをみせるが、それ以前の主な出来事として挙げられるのは、明治五年（一八七二）に東京府が女性の断髪禁止の告諭を公布したことである。男性の断髪が推奨された一方で、女性の断髪は新聞などで厳しく批判され、女性が断髪しないように、罰金または拘留を受ける軽犯罪として取り締まったのだ²⁰。女性の「長い黒髪＝美しい」という価値観は長く日本人に根付いてきたもので、明治に入って断髪する男性に便乗したのか女性が断髪するという現象が起き、世間一般として女性の断髪は仏門に入るか未亡人という証拠であったため、東京府はこのような処置を行ったのである。明治五年（一八七二）の女子の断髪禁止の告諭から十三年もあとになるが、婦人束髪会の発足で、髪を断髪することなく、衛生的な髪型にすることができ、まさに画期的で、束髪は洋装よりも急速な広まりをみせたということになる。

さて、女性の衣服が洋装に簡単に変わることはないために、女性の服装を和装から洋装へ改良することについて長くその是非が、女性雑誌のなかで議論や提案されてきたことは先に述べたが、今現在においてもファッションと雑誌というコンテンツは切っても切り離せない存在である。それは、いつの時代においても同じことで、女性における洋装の広まりをみていく上で、とても重要になってくる。次に、「雑誌」という観点から当時の雑誌は女性たちにとってどのようにファッションに関することを伝えていたのか、またそれによる洋装の広まりの関与を探っていきたい。当時発行されていた数ある雑誌のなかで、女性の和服と洋装を比較す

る服装論は、鹿鳴館洋装が批判された時期（明治二十年（一八八七）頃から鹿鳴館での華やかな舞踏会が批判されるようになる）から論じられるようになった。徳富蘇峰が明治二十年（一八八七）、「国民の友」の創刊号で皇后の思召書をひいて洋装を勧めながら、実用を無視した華美な流行を批判したことや、吉岡哲太郎が『日本人』で袴を用いて和服を改良することを主張したことなどが挙げられる²¹。和装自体が活動的ではないということと、この時期の洋装はコルセットを用いるので腰をかなり締め付けられ、健康上問題があった。当時、女性雑誌において洋装を扱ったのは日本初の女性ジャーナリスト、羽仁もと子である。羽仁は、『家庭の友』で「新案婦人服」として和服を作り直した簡便な洋装を提案した²²。

また、明治末から大正期に最も人気のあった女性雑誌の『婦人世界』では、まだ和服のみを紹介していた。『婦人世界』のなかでも、明治四十年（一九〇七）発行の衣服を特集した臨時増刊号『衣裳かゞみ』は、和服の選び方、保存法、着こなしの解説本となっているが、「日本服と西洋服ではどちらが良いか」と題した記事で、洋服のほうが活動的であると認めてはいるが、日本家屋や、体格が洋服に適さないから和服の方が良いとしている²³。

少し話が逸れるが、この頃発行された雑誌に興味深い記事がある。明治四十三年（一九一〇）三月一日、同文館より『婦女界』という女性雑誌が創刊される。気になった記事のテーマとしては、「春のお化粧は如何にすべきか」というものである。その記事で理容館主の遠藤波津子は、日本従来の化粧法である白粉をただ無造作に塗るということを批判的にみており、日本人は白い肌が良いという概念からただ白くつくように白粉を塗るが、外国人は生きた化粧をすると評価している。白いだけが美しいということは間違った認識で、塗った白粉を通して血色が見える温かみのある白い顔でなければならぬと述べている²⁴。洋装の着手という点に関しては日本人の体格に合わない等、『衣裳かゞみ』の方で述べられているが、お化粧は、外国人を見習うべきという声があったようだ。

大正に入り、大正八年（一九一九）くらいになると、洋装化への提案が積極的になされるようになる。大正八年（一九一九）発行の『婦人-

友』四月号には、「衣服経済号」と題し、和服の不経済さや手入れの手間を改める方法を論じた記事を六本掲載し、うち「画家のみた日本人と洋服」二本では強く女性の洋服着用を薦めている。また十一月には「洋服を着はじめた」という体験談を載せている²⁶。

同じ年の『婦人世界』では、幽閑子という人物により、「日本服の改良問題」と題して、和服が活動的でないこと、金銭的にも不経済であること、手入れに手間がかかることが指摘され、「簡素で便利な」提案が六回に渡り連載された。そこでは、洋服にすべきという「改進説」と、和服を改良していこうという「折衷説」の二つの立場があるとし、洋服を推す意見を「形態美も色彩美も自由であり、動作が軽快にでき、布地が丈夫で雨にも塵にも強いから結局徳用でもある。それに裁縫その他の手入れの手間が非常に省ける」とあり、改良服を推す意見を「衣服改良ということは住宅の方からも考えていかなければならない。礼儀習慣国情を無視するわけにもいかない。まして多年馴らされた服装美に対する日本人の考えが変わらない限りは、急激に変化させようとしてさせられるものではない。先ず現代の(当時の)住居は和洋折衷とも言うべき推薦主義だから、衣服も改良服ぐらいに止めておいたほうが良い」と紹介している²⁶。

また、華族が洋服で結婚式をした例を紹介し、結婚式や新婚旅行で洋服を着ることを薦める記事(代議士夫人、櫻井鈴子「神々しい洋装の花嫁」『婦人世界』大正九年(一九二〇)十月)やボストンで図書館員となった日本女性が、「アメリカにおいて考えた日本婦人の改良服装」と題して、日本の家屋に調和する改良服を提案している(平野千恵子、同上、大正十年(一九二一)四月)。女学生の服装が華美であるとし、より活動を制限しない洋服スタイルの質素な制服を主張した文部省事務官による「女学校の制服を制定せよ」という記事も掲げられ(同上、大正八年(一九一九)七月)、全国の女学校の校長にアンケート調査を行い、文部大臣にはその意見をぶつけてインタビューをしている(同上、大正八年(一九一九)十月)。

こうした背景には、大正七年(一九一八)〜一九一九年に文部省が開催した家事科学展覧会およびそれに引き続いて九年(一九二〇)ま

で開催された生活改善展覧会で、服装についても虚飾・虚礼を廃して機能的な衣服を採用することを奨励する方針が具体的に示されたこと、また九年(一九二〇)に文部省主導のもと、教育家・官僚・有識者による生活改善同盟会が設立され、洋装化を宣言したことがある。洋服採用の理由として、風儀、衛生、便利、経済上の長所が挙げられ、洋服推進は、政府主導の生活改善の一つであった。教師のための生活改善講習会が開かれ、着物の下に下穿きを着用することや、洋服への理解と着用が説かれた。この頃登場した女性の車掌には洋式の制服が支給された²⁷。

この時期、欧米での女性の洋服はコルセットから解放され、機能的なものとなっていた。フランスのポール・ポワレ(フランスのファッションデザイナー/一八七九—一九四四)はガードルやブラジャーを発明してコルセットを廃し、スカート丈が足首までの簡素なドレスを流行させた。第一次世界大戦の中で仕事をするため機能的な洋服を着るようになった女性たちは、その後も断髪し、膝丈のショート・スカートを穿くようになった。大正時代に生活改善運動のなかで紹介されたのは、こうした健康的・機能的になった新しい洋服である²⁸。

しかし、女性の洋服の着用者は教員などに限られ、まだ一般には普及しなかった。米国生活を長く経験し、家族は皆洋服を着ることにしているという医者の中林正巳は、「日本でも、近頃は男子で洋服を着る人が大分増えましたが、婦人で洋服を着ている人は殆どありません。…困るのは、妻が外へ買い物に出る時で、洋服を着て八百屋や魚屋へ入るわけにもいかず、それに近所の子供たちは、婦人の洋服を珍しがって、大勢でついてきて、あれは『洋妾だ』などと言うそうです。」と書いている²⁹。

このことから、大正八年当時では政府主導で洋服が推奨されており、同じ頃の海外のほうに目を向けてみると旧来のコルセットが廃され、それに代わるガードル、ブラジャーの発明、さらにより動きやすさを重視したショート・スカートがすでに海外女性たちの間で着用されていた一方、日本国内において、一般女性が普通に街中で洋服を着用していると、好奇な目で見られたという事実がわかった。海外ではショート・スカートを穿く程までに、洋装文化が進んでいるというのに日本において、一般女性に洋装が定着するのはまだ先になるということである。

それもそのはずで、永嶺重敏の戦前の女性読者調査をもとにした考察によると、『婦人世界』においてではあるが、その読者の中核層は職業婦人や女学生であり、女工がその周辺の読者として存在したようだ³⁰。

少し、余談ではあるが、大正八年〜十年（一九一九〜一九二一）にかけての雑誌購読者状況をみると、調査対象の属性は「女工」ではあるものの、『婦人世界』は上位に位置づけられている。大正八年（一九一九）に東京で行われた「製糸工場に於ける女工事情」の読物調査の結果では、二七〇の回答のうち、第一位の『婦人世界』が一〇一人に対し、第二位の『婦女界』は六十六人となっている³¹。

また、大正十年（一九二一）の東京市社会局による「女工に関する調査概況」掲載の「講読雑誌」調査では、七二二の回答のうち、二〇一人が『婦人世界』と答えて第一位となっており、第二位の『主婦の友』の九十六人とは大きく差が開いている³²。

この調査結果から『婦人世界』は女工という一般的に女性が就く職業の人たちまで読まれていたことがわかった。

他に同じ頃発行されていた雑誌として、『婦人くらぶ』という大正九年（一九二〇）十月に講読社より創刊された女性雑誌の内容を一部紹介したい。

創刊号の中に「不景気は『流行』の上に如何響いたか」と題した各業界の人々のインタビュー記事がある。「国民的平常着（ふだんぎ）」という内容のところが高島屋呉服店の蓮尾文之によると、「我々は丁度、西洋人が平常着に用いる紺サージ（Serge）織りの洋服地。学生服等に用いる。）のような経済的目的に沿った万人向けの平常着が生まれることを望む。」とし、「原料は国家経済上、国産品に仰がなければならぬ。しかし、我々が要望するのは幾分平常着の理想に近い従来の銘仙（平織の実用的絹織物）よりもさらに一層国民的な新組織の製品を得ることなのである。」³³と述べている。やはりここでも、女性というよりは日本国民が普段着に西洋人が用いる紺サージのような経済的かつ万人向けの普段着が誕生してほしいと洋装を推しているように捉えられる記事がある。

文中に「平常着の理想に近い銘仙」とあるが、銘仙といえば絹織物としては安価でかつ、丈夫な生地なので第二次世界大戦までは衣服以外に

も布団地に使われており、日本人の衣料に欠かせない織物であった。蓮尾氏はこの実用的な銘仙を上回る生地を得ることを要望すると述べているのである。

また、洋装とあまり関係がないが、ファッションの流行という目線でみると、「国民生活と流行」という題で、白木屋呉服店の若雨生が「いつの時代にもその反映として流行があり、またその土地により独特の流行があつてはつきりとローカルカラー（郷土色）が表れている。」とし、具体的には「戦争当時は一般国民生活が緊張していた為に、その流行衣裳もなるべく地味で、どちらかといえば簡略という意味を含め、色、模様、すべてが沈んでいた。戦後財界の好況を来した結果、日常生活の向上により、戦時中と違い、華美に近い派手なものが好まれるようになった。」と述べており、「日常生活の向上により、流行に及ぼす影響は甚大なるものであり、その時の傾向が著しく変化する。」³⁴とも指摘している。

ここで述べられている流行については、どういう物が流行ったかというよりも全体的にみて各時期に見合った流行の変化がわかりやすく説明されている。

ここではつきりと述べられていないが、この記事を読んで、人の心理状況が服装にも表れているのではないかと思う。戦時中は緊迫した状況で質素で儉約な生活を送っているうちに、心の方も段々質素になり、色・模様が沈むのは当然の成り行きで、戦後、財界が好況となれば、日常生活の向上以外にも、人々の気持ちも向上し、華美な色・模様を無意識のうちに選んでしまうのではないだろうか。好景気のなかでは、自然とお洒落をしようという意識が生まれるのではないだろうかと思う。

この『婦人くらぶ』創刊号には服装についてだけではなく、「束髪を選び方」という題のインタビュー記事も載っている。

資生堂の三須裕（記事ではミス・ユタカ）は、「どんな束髪を選ぶべきかー顔の形による束髪の結び方」という副題で、「もう日本髪がなくなるのではないかと思うほどこの夏から婦人の束髪は非常に流行している。」と述べており、「そうして束髪も段々と崩れてきて昔私達の母親や叔母さんが結つたいやに櫛目の立った束髪は少なくて結び方が自由で生き生きとしてきた。」と束髪の結び方に変化が生まれたことを指摘して

いる。また、「日本髪はなくなっていく運命だったのだと私は思う。何故なら、どうもこの頃の日本婦人、とくに若い婦人たちに日本の髪が似合わなくなってきたからである。」と述べた上で、その理由については、「私達の目に見慣れてきたということもあるが、第一に、この頃、若い婦人の顔とその体つきが変わってきたというのがある。」としている。また具体的な変化について三須は、「顔はやや丸みを帯び、背も高く、肉付きも良く、それに着物の色、持ち物の色、形、用材等の変化」として挙げている。他には世間的にみて、婦人の相手の男性が殆ど洋服姿であることから束髪が流行してくるのは自然なことだと述べており、日本髪の方が似合う読者向けに、「束髪よりも日本髪の方が似合う人は、一概に人の真似をせず、前髪の具合から鬚の結い方に今までの日本髪を風をもじるということも面白いと思う。(アレنجしたら斬新で面白いのではないか)」とアドバイスをしており、「特に注意するべきなのは、そのお化粧の仕方と帯の色合いである。そしてその二つのものは、その束髪と対するほどの柔らかいものでなければならぬ。」と注意点を付け加えている。同じ頁で、三須は「外国婦人を参考にした方が実際教えられるところが多いだろうと思います。」と述べており、外国人の束髪をそのまま真似するのは(日本人の骨格上)無理があるが、顔の形に合わせた自由な工夫が出来れば良いとしている³⁵。

また、婦人の日本髪が似合わなくなった理由として、体つきが変化したと三須は述べているが、その背景には明治以降の西洋文化の移入や、第一次世界大戦の好景気によるものだとみている。体つきの変化においては、現代の私達の平均身長が江戸時代や明治時代に比べて圧倒的に高くなっているのと同じで、西洋文化の移入で食の文化に変化が起きれば体格が変化するのも当然の成り行きということになる。

そしてここでも「外国婦人を参考に」という考えがでてきた。先に、「**女界**」という雑誌の内容で「春のお化粧は如何にすべきか」というインタビュー記事を紹介した。ここでは、理容館主、遠藤波津子も同じように「外国婦人は生きた化粧をする」と評価しており、日本婦人に外国婦人の血色のある生きた化粧を見習ってほしいと述べていた。

こうしたことから、洋装を取り入れていくなかで、間違った取り入れ

方をするのではなく、オリジナリティを参考にしなさいというメッセージの他に、少なからず、日本人独特の外国人への憧れのようなものがあったのではないだろうかと思う。

最後に、大正十二年(一九二三)に起きた関東大震災以降の服装への影響をみていきたい。

日本洋服史において、関東大震災といえど女性の洋服への転換となるきっかけの一つとして一般的には言われているが、果たしてそれはどうだろうか。

関東地方南部をマグニチュード七・九(最大震度六)の激しい地震が襲ったのは、大正十二年(一九二三)九月一日午前一時五八分だった。被害は震災予防調査会の報告によると、死者九万九、三三一人、負傷者一〇万三、七三三人、行方不明者四万三、四七六人、焼失戸数四四万七、一二八戸、全壊戸数一二万八、二六六戸、半壊戸数十二万六、二二三戸、津波による流失戸数が八六八戸で、被害総額一〇〇億円にのぼった³⁶。(二〇〇六年以降、理科年表では死者・行方不明者一〇万五千人余としている)

とくに本所被服廠跡の惨劇は酷く、押し寄せた避難民の荷物に火が移って大半が焼死、死者約三万八千人に達した。本所被服廠跡は現在の東京、両国国技館の近くにあり、今は「横網(よこあみ)町公園」と呼ばれている。どういった場所だったかという点、陸軍の軍服を作っていた建物の跡地であった。震災発生当時は被服廠の機能はよそへ移転し、今の東京都の公園用地になっていた。空地だったため、東京ドーム一個半ほどの敷地に、四万近い市民が避難してきて、そこで多くの人が亡くなることになってしまったのだ。

震災当時の被服廠跡の惨劇は、震災から約一週間後の大阪朝日新聞が伝えている。その様子がわかる部分を一部取り上げたいと思う。「被服廠跡は約一万五、六千坪もあらうか、それが全部死体で覆ひ尽くされ殊に石原町(隣接する町)停留所前に当る箇所は十重二十重に折り重なって焼死してゐる、道路に沿ふた小溝には死体を以て埋め尽くされ焼けた老若男女の区別すら付かず、能く見ると中には小児を確と抱いたまま死んでゐる女もある」³⁷(図3参照)と書かれている。

風吹けば骨片が舞上る

十重二十重に折り重つて

一萬五千坪に三萬五千の死體
只一人助かつた青年の實話

大阪朝日新聞 1923年9月9日 7面

この記事は、昭和七年（一九三二）十二月十六日に発生した白木屋（東急百貨店の前身）の火災もズロス着用で一役買うことになる。

火災発生当時、白木屋では十二月ということもあり、歳末大売り出しとクリスマスセールが重なり、店内では華やかな飾りつけが施されていた。閉店前の点検でクリスマスマツリーの豆電球の故障を発見して修理しようとしたとき、誤って電線がソケット（電球をねじ込むための器具）に触れてしまったためスパークによる火花が飛び散り、それが着火して火災になったといわれている⁴⁰。

この火災は、八階建てのビルの四階以上を約一四、〇〇〇平方メートル焼失し、火災による死者が一人、墜落による死者が十三人、負傷者が六十七人という惨事となった。この墜落による死者のうち、何人かの女性には下穿きを着用していなかったために、上層階からロープを使って脱出しようとしていたところ、裾がめくれるのを押さえようとしてロープから片手を離し、体重を支えられなくなり墜落死した。

白木屋の火災で少しはズロス着用の広まりを見せていくが、洋装自体の広まりは、職業婦人の増加に伴っていくものと思われる。働きやすい服装となると、どうしても和服よりも洋服のほうが勝るので、洋装の定着は職業と関連するのではないだろうか。

第二章では女性における洋装の広まりをみてきたが、結果としては職業婦人が定着していく昭和頃まで、完全な洋装というのはなかなか定着しなかったようだ。やはり、古くから着慣れているものから新しい衣服に移り変わるといのは難しいものなのだろうか。

洋装化の広まりをみていく上で明治十八年（一八八五）の婦人束髪会の発足により、洋風の髪型が全国的に広まりをみせたと紹介したが、これは女性の洋装化への大きな役割を果たしたといえよう。女性は短く断髪してはいけなかったが、長く結われてきた日本髪からの解放により、経済的にも身体的（重い日本髪による頭痛等）にも良い方向へと導いた。髪型は洋装化への大きな一歩を踏み出したが、衣服の方はなかなか洋装化しなかった。そのため、さまざまな女性雑誌で洋装化への是非が議論されてきた。また当時人気があり、洋装を推奨する記事を載せていた『婦人世界』の読者の中核層は女学生や職業婦人、その周辺の読者には

図3 大阪朝日新聞
1923年9月9日 7面

この記事から被服廠跡だけでなく、その周辺地域も甚大な被害を受けていることがよくわかる。他には浅草六角や吉原遊郭などの歓楽街も大なる被害を受け、浅草公園の名物、十二階の凌雲閣も八階からへし折れ、駿河台のニコライ堂も焼けおちた。

震災後の東京の復興ぶりはめざましく、驚くはやさでビルが立ち並んだ。丸の内はビジネス街として発展し、渋谷、新宿などの副都心はターミナル駅を中心に急速にのび、田園都市が開発されていった。

とくにカフェ等の増加は著しく、大正十三年当時、東京警視庁管下でダンス・ホール、バー、カフェの総数は、一、五〇〇軒、女給は一、五〇〇人、全国で一三〇、〇〇〇人であった。なかでも銀座のカフェ・ライオン、黒猫、孔雀、大阪の赤玉、新興などは有名で、ダンス・ホールのフロリダはダンス好きの人々を喜ばした³⁸。

女性の職業進出や断髪の流行、ダンスの流行はそれとともに洋服を着る人を増加させたが、完全の洋装にはならなかった。洋装の下着は腰巻姿というのが大部分で、被災時、着物で逃げまどう女性の醜態や焼死した女性の無様な姿がさらけだされた。このことが洋服、洋風下着を用いる女性を増加させた。

先で少し紹介した生活改善運動が盛んに行われ、生活改善同盟会では「外出には必ずズロスを」という声をあげ、この震災を境に女性がズロス（下穿き）を着けるようになった。しかし、これまでの長い習慣はすぐにみなが着用するまでにはならなかった³⁹。

女工が存在していたことがわかった。彼女たちが、実際洋服を着用していたかどうかは定かではないが、私の見解では、洋装を推奨する記事を読んで影響を受ける人もなかにはいたのではないだろうかと考える。

関東大震災以降は、洋服を着る女性が増加したが、みなが着るまでには至らず、先に述べたようにこれ以降の時代で職業婦人の増加に伴っていくのである。

第三章 職業婦人、モダン・ガールの実態

第二章で女性の洋装化には職業婦人の増加に伴うと述べたが、第三章では、女性の洋装を述べるうえで、ファッションを通して当時の女性の生き方を職業婦人や当時流行していたモダン・ガールといった具体的な人たちに焦点を当て、みていきたいと思う。

まず、職業婦人について、定着していく世の中になるまで、世間からどのような目で見られていたのかみていきたい。そこで、明治期と大正期における職業婦人を比較していきたいと思う。職業婦人については、主に村上信彦著の『大正期の職業婦人』（ドメス出版、一九八三年）を参考とする。明治期の職業婦人は、ごく一部では先端的とジャーナリズムから評価された。しかし、一般的には疑わしい目で見られ、嫌悪や反感を受けることが多かった。女性が職を持って働くことが女性の道に外れた、女性らしくない不当な行為のように世間的には感じられたのである。女性の働きが、家に結びついた無償労働の時には問題とならず、家を離れて個人の働きが有償労働となったときに、非難や偏見が生じるのである。これは、家制度の影響が大きいといえる。つまり、女性は家、男性は外で働くという考えが強く根付いているため、明治の職業婦人はこのような茨の道を通って生きなければならなかった⁴¹。

一方で、大正期の職業婦人は、資本主義の発達に伴って女性の職業が否応なしに拡大され、かつては特殊だった就職者数が増大して社会的に無視することが出来なくなったのである。こうした状況にいち早く反応するのはジャーナリズムで、大正になってから新聞雑誌はしばしば女性

の職業を取り上げるようになる。女性が職に就くこと＝正しい一つの生き方⁴²という考えが世間に浸透した。明治期の考えと比べると大きな進歩ではないだろうか。

次に、女性が就く職業にはどのようなものがあったのかみていきたい。一般的に女性が就く職業として、タイピスト、女子事務員及び簿記係、電話交換手、教員、産婆、女髪結、販売員、雑誌記者、女工等がある。女工と一口に言っても、印刷局や、専売局、砲兵工廠等さまざまあり、条件は厳しくなるが挙げた以外にもあるので、職種自体は意外と多いという印象をうけるのではないだろうか。

ここで、ファッションと関係がありそうな職種で働く職業婦人の実態をみていきたい。まずは、デパート店員からみていく。

デパートが女性店員を採用するようになったのは明治三十四年（一九〇一）のことである。三井呉服店（現在の三越）が試験的に三名使用したのが最初で、それから三年後の明治三十七年（一九〇四）、三越と改称したとき三十名採用してから定着した。三越が、正式に女性の店員を三十名も採用した理由は、一つ目が、試験的に採用した三名の成績が良かったからというのと、二つ目が、男性店員の場合小さいころから時間をかけて養成するのだが、二十歳になれば、三年間徴兵にとられるため、その間の空白は店にとって大きな損益、女性にはそのロスがないというのが理由であった⁴³。

三越の事例でいうと、永く勤めてもらいたいため、結婚後も退職を迫るところか、産前・産後休暇も必要なだけ休むことができた。これは当時としては珍しい待遇になるのではないだろうか。しかし、欧米と違い、妻の発言権が弱い日本は家制度が強固で、既婚の女性が外に出て自由な時間を持つ・働くことは、世間に対し恥ずかしいという認識があった。これにより、初期の営業方針を棄て、資格を未婚女性に限り、短期回転の使い捨て政策をとるようになった。こうして大正期に入ると、男性でなければならぬのは呉服売り場のように多年の年季と知識を必要とする特殊な売り場だけとなって、大半の売り場は女性店員で代用されるようになり、デパートといえれば男性よりも女性の職場とみなされるようになった。また、見た目にはなやかで美しく、若い娘の心を惹く魅力があっ

た。しかし、実際その場で働く者にとっては必ずしも楽な職場というわけではなかったようである⁴⁵。

デパートで働く女性の事例として、大正五年（一九一六）より松坂屋で勤務していた荒井直子という女性の例を挙げたい。こちらは村上信彦の各職に就いていた女性に対してインタビューした内容である。まずは彼女の生い立ちからみていきたい。明治三十五年（一九〇二）二月、東京市下谷区御徒町に生まれる。父は伊藤呉服店（現在の松坂屋）に勤めていたので、百貨店とは縁があった。母親は直子を産むとまもなく死亡したが、父が再婚し、父と義母とその連れ子と後に弟妹が生まれ、幼少期は何不自由なく幸せに暮らした。しかし、大正二年（一九一三）小学五年生のとき、父が心臓麻痺により、四八歳でなくなる。そのため、小学校を卒業した大正五年（一九一六）十三歳のときに、上野の松坂屋に勤めることになった。最初の職場は食堂で、着物（メリンスカ銘仙）の上に白いエプロンを掛け、紐を後ろで蝶結びにし、お給仕をした。二年後、化粧品売り場に回された。当時流行のウテナ、クラブ（化粧品会社の名前）などの化粧品が人気あった。一日中立ち仕事で、交代時間がなく、トイレに行く時が唯一の休憩だった。夏は屋上でのイベントで就業時間が午後十時になることもあった⁴⁶。

それから五、六年立ち仕事をしていた所為か、十九歳の時に腹膜炎をおこし、三カ月休養する。それが治ると再び食堂に戻り、今度はレジの仕事させられた。その後、文書課に配属され、そろばんを希望し、計算課に移り、あるいは商事課で仕入れの事務作業をしたが、事務系の女性は一か二人、大抵が女学校出のエリートお嬢様であった。直子はそんななか、退職する一、二年前にその監督になったのだ。そして、昭和二年（一九二七）、二十六歳のときに結婚を理由に退職した。

そんな彼女のライフスタイルというのは、松坂屋自体が年中無休だったため、休みは月に一日か二日程度。それも交代で休むのでなかなか仲間と遊びに行くことが出来ず、年に何回か、映画を観たりお花見をしたり、海に行ったりした程度である。

毎日着物で通勤するため、同じものばかり着てもいけず、冬はメリンカ、銘仙などの帯付き、夏は縮みなどに帯で、冷房のない当時は暑くて

たまらなかった。たとえ扇風機が回っていても会社のルール上、店員はその近くで立ってはいけないことになっていた⁴⁶。

このように一見華やかそうなデパート売り場で働く女性の労働条件は、トイレに行く時がやっとの息抜きだったという程、いかに過酷であったかがわかる。

少し余談ではあるが、「今日は帝劇 明日は三越」という言葉は大正三、四年頃、三越と帝國劇場が提携してプログラムに掲載したことばである。デパートは「売り子」という職業婦人の仕事の場でもあり、また買い物客にとっては娯楽の場としての要素も持っていた。

次に、美容師をみていきたいと思う。美容師という言葉は大正に入ってからでてきたが、それと同様に当然のことながら美容師という職業も大正期に生まれたものである。その先駆けは山野千枝子という女性である。彼女は大正十一年（一九二二）にアメリカから帰国して、東京丸ビル四階に丸の内美容院を設立したのが始まりである。もとをたざせば、アメリカで学んだ技術や知識が出版点になっていたので、日本で発達したのではないということになる。美容院が何故我が国に浸透し、急速に広まっていたかという点、もともとある髪結所は日本髪専門なのに対し、美容院は染色やかつら、化粧や美顔術、マニキュアやペディキュアなどの前身美容から着付けに至るまで極めて守備範囲が広く、近代化が進む日本において美容院が急速に受け入れられるは何も不思議なことではなかった。やがて昭和中期になると、日本髪の需要が衰えていき、美容界は髪結業を圧倒するほどの勢力を持つようになった⁴⁷。

山野千枝子は、大正二年（一九一三）に結婚してアメリカに渡ると、大正十一年（一九二二）に帰国するまでの十年間、ニューヨークのワナメーカー・ビューティ・スクールであらゆる調髪、アイロン、パーマネント、化粧品、毛製術、美顔術、染毛、マニキュア、トリートメント（頭皮マッサージ）その他の技術を修得し、帰国の際にはそれに必要な器具一切を購入して、丸の内に美容院を開いた。だが、彼女は出発点こそアメリカの器具に頼らなければならなかったが、将来日本に美容術を普及するにはなんとんでも国産品を使うようにしなければならぬと考え、日本理髪器具会社にアメリカのカタログをすべて提供し、工場長と協力して製作に

努力した⁴⁸。山野千枝子は美容界の常に先駆者としてさまざまな功績を残している。たとえば、マルセルの有名なマルセル・ウエーブ（現在ではフィンガー・ウエーブが一般的な呼び名でその名前の由来は一八七二年にパリの結髪師マルセル・グラトリーの作り出した焼きこてによるウエーブが元となる。このマルセル・ウエーブが上流婦人や女優たちに広まった⁴⁹）（図4参照）を日本に普及させたのは彼女であった。人形の代わりに生きた人間をモデルとして登場させ、マネキンという新しい女性の職業を生み出したのも彼女であった⁵⁰。日本初の国産パーマネント・ウエーブの機械ジャストリーをつくったのも、赤外線美容術を開発したのも彼女である。さらにアストリンゼント（お肌を引き締める効果）やクレンジングの化粧法、出来るだけ自然に近い化粧こそ真の美容なのだという考えを定着させたのも多年にわたる彼女の主張の結果だった⁵¹。

現代のあらゆる美容の基盤を作り出したのはまさに、ほとんど彼女の功績によるものだといってもいいだろう。

さて、近代女性のファッションを語る上で外せないのは「モダン・ガール」だろう。当時モダン・ガールと呼ばれた女性たちはいったいどのような存在だったのか次にみていきたい。

まず、「モダン・ガール」という言葉についてみていく。モダン・ガールの「モダン」という語は「現代的な」という意味に訳すことができる。直訳すると「現代的な女の子」という意味になる。現代的な女の子とはどういうものなの

だろうか。モダン・

ガールの「モダン」

と似た言葉で「モ

ダニズム」という

言葉があるが、モ

ダニズムとは近代

主義という意味に

訳すことができ、

関東大震災以降、

焼け土の中から復



図4 マルセル・ウエーブのイメージ
寺内萬治郎「初春の女」
絵葉書 朝日新聞社 1935年1月より

興した東京は、整備された道路に耐震耐火のアメリカ式鉄筋コンクリート建築が立ち並び、公園や各種の社会施設を設置し、「新東京」といわれる現代都市が誕生する。被害の少なかった丸の内オフィス街を中心に、渋谷・新宿から郊外へ膨張した。東京に続いて大阪も、「大大阪」へと市域拡張が行われた。「東京の丸ビル、大阪の堂ビル」といわれ、丸の内ビルディング・堂島ビルディングが象徴する新しい都市の景観は、まさに欧米の二十世紀モダニズムであった⁵²。

ヨーロッパの女性が大戦中に断髪し、長裾ドレスからショート・スカートの筒型ドレスに変わったのは、戦時中の生活的欲求であったが、戦後はモダニズム・ファッションとなった。新流行の先導者はアメリカの若い女性たちであった。モダン・ガールは衛星に悪いコルセットを用いず、長すぎて活動的ではないスカートを短くし、気分を晴れやかにするため煙草を吸うのである。

新スタイルはスタイルブックによって拡散してだけでなく、「モダン・ガール、モダン・ウーマン」を分析する「ニューヨーク・タイムス」[The New York Times]などの新聞情報によっても、日本へ伝わった⁵³。

また、他に「モダニズム」という語は数々の辞典で次のように紹介されている。「厳密に云えば、フランス革命から現代に至る一世紀の間に生じた自由平等の思想、唯物思想、個人主義的思想、自然主義的思想を指す。普通には「何でも新しがること。」（『モダン語漫画辞典』（洛陽書院、一九三一年）、「その特徴は、(一)享乐的で眼前の目新しい官能を刺激する生活を追い、(二)拝金的で、すべてお金に換算して考え、(三)表面的で内部的深みはないが生活意欲は強い等でエロ・グロ・ナンセンスの現代相（モダーニズム）はまさにこれにあてはまる。」（『和英併用モダン新語辞典』（底本小山湖南著、金竜堂、一九三二年）⁵⁴。

ここからわかるのは社会一般の人々はモダン、モダニズムという語を享乐的とする語義を含む言葉として享受し、使用していたことである。続いて「モダン・ガール」については、次のように紹介されている。「近代式女という意味であるが、普通には断髪洋装の女を多少軽蔑している。」（『音引正解近代新用語辞典』（修教社書院、一九二八年）、「近代女性及び男性。大正末期から昭和へかけての流行語で軽佻浮薄、享乐的

な若い男女に対する軽蔑語。殊にモダン・ガールに対しては「毛断蛙」「毛断嬢」「もう旦那がある」等々いわれている。」「(『モダン用語辞典』(実業之日本社、一九三〇年)、「都会的でダンスを好み、映画を好み、更に怠けることと恋愛遊戯とスポーツを好み、若干の露出症で享樂的な軽佻浮薄な娘の軽蔑語」(『モダン語漫画辞典』(洛陽書院、一九三一年)⁵⁵、また、『尖端語百科辞典』(尖端社、一九三一年)においても同じような内容が掲載されており、上記でダンスやスポーツを好んでいたという趣味について言及し、モダン・ガールの特質が一層鮮明となっている。

大正十三年(一九二四)、日本で初めてモダン・ガールという言葉を使用したとされているのは批評家の北澤秀一である。北澤氏は雑誌『女性』(大正十三年(一九二四)八月号)の「モダン・ガール」のなかで次のように述べている。

私の此処に云ふモダン・ガールは、いはゆる新しき女でもない。覚めたる女でもない。もちろん女権拡張論者でもなければ、いはんや婦人参政権論者でもない。それからガールと云つても未婚の若き女性のみをさすのではなくて、もし彼女が私の考へてゐる近代性を持つてゐるならば、既婚の婦人も含むのである。(中略)唯人間として欲するままに万事を尊重するまつたくあたらしい女性である⁵⁶。

また、北澤氏はモダン・ガールを「虚栄の犬」や「美しい仮面を被った狐」⁵⁷などと表現していることから北澤氏が日本でモダン・ガールという言葉を使い始めた当初から享樂的行動が批判の対象だったことや、北澤氏自身もモダン・ガールを厳しく批判していることが伺える。

婦人運動家で、青鞥を創刊し女性の解放に貢献をしたことで有名である平塚らいてうは、モダン・ガールの定義を次のように述べている。

「ほんもののモダンガールは新しい女の母胎から生れた新しい女の愛娘なのです。」⁵⁸とし、そして「彼女は言ふまでもなく新しい時代です。未来を創造する力です。思想に、感情に、行動に、生活に来るべき社会を暗示し、予感せしめる生命の流れです。」⁵⁹と述べ、女性像が流動する時代を希望的に予見しているようにみえる。

また、街中で実際見かけたモダン・ガールについては次のように述べる。今日銀座街頭のこのモダンガールの自由な軽快な姿態は何とした

変わり方でせう。実際彼女たちの中には洋服を着て生れて来たかと思はれるほど、しばらく見ない中につくりと洋装が身について来た人も少なくありません。確かに最近の日本の若い女性たちが服装や髪やお化粧などの外形の上を示した欧化⁶⁰というよりもアメリカ化には驚嘆せずにはゐられないという気がしました。(中略)若しあゝいふ女性をモダンガールと呼ぶのなら、金と時さへあれば誰でもすぐ容易になれさうに思はれる⁶⁰。

ここでわかるのは、銀座街頭ではちらちらとモダン・ガールの姿があり、ここでいう平塚氏の言葉は彼女たちの洋装に違和感なく自然に着用しているというのと、服装や髪やお化粧がアメリカ化(先端的)していることには驚き、感心するが、外見だけならばお金と時間さえあれば誰でもすぐになれるのではないだろうか、真のモダン・ガールではないのではないだろうか。という風に批判的にとらえているように読み取れる。そして上記の平塚らいてう著「かくあるべきモダンガール」(『婦人公論』昭和二年(一九二七)、六月号)が出された翌年には、昆虫学者三宅恒方の妻で評論家の三宅やす子⁶¹著『愛の讚美』(教文社、昭和三年(一九二八年))には次のように述べている。

先頃、新時代の女性といふような事が語られて居たある合評會の記事を読むと、「新しい女は平塚雷鳥から新紀元をして居る」といふような意味があつたが、あの時代に、あのいき方をした少数の女性の行動が、今も実質以上に世人の頭に固着して、それ以外のものを考へられなければ、女性にとつて有り難いことではない⁶²。

平塚氏は、女性に稀に見る、正確さを持たうとするところの婦人である。あるがま、の事象を盲目的に容れ入れて、與(あた)へられた福袋の、中も見ないで捧持して暮す、多くの今までの女性の「不正確」に甘んじ得なかつた人である。偶々其女性には珍しい性格が、今から過去何年に於いては驚異とされたが、時代の変化につれて周囲の進展は、今更それらの事を喋々するものでなくなつた。平塚氏の如きは、好んで新奇に走るのも何でもなく、只、氏自身の信ずる途に進まれた迄だと思ふ⁶³。

以上のように、新時代の女性と平塚らいてうの生き方について自身の

意見を述べている。三宅やす子はここで平塚氏があたかも「新しい女」と世間ではいわれているが、今まで多くの女性が自分の権利・権限を持たずにそれが当たり前だと思つて生きてきたことを平塚氏は「不正確」だと主張し、本来あるべき「正確」な世の中にするために、自身の信じる道に進んだだけだと説明している。

さらに、三宅氏は新時代の女性の髪型について次のように述べている。

ところで、新時代の女性は、耳隠し七三、といふような形容で表示される事がある。七三の分髪は、既に、六七年前にはじまつた髪で、むしろ古い形であるし、耳隠しも二三年來で、もうあきた頃である。此頃は、洋風結髪師が窮余の案かと私には感ぜられる、もとの庇髪位に高くふくらませて七三にした髪が、まづ一番新しいのであろうか⁶⁴。

私は此髪の流行につれて、所謂新時代の女性なるものの存在を、悲しみはじめた一人である。何故ならば、折角、化粧にも結髪にも、個性をあらはしかけた日本婦人が、「洋風」といふ看板に魅せられて、日本髪の類型的であるのと、少しもかはらない非個性的な髪を結んでもらつて、しかも日本髪より不衛生な、櫛の通らない逆毛でふくらませた前髪に、おびただしい東都の埃をかぶつて、得々として電車などに乗る姿は、どうみても、これを、新時代と讚美する氣にはなれないからである⁶⁵。

このように、流行りの髪型に対して、個性もなく、折角「洋髪」には衛生的というメリットがあるのに、「洋風」という看板だけに魅せられ、結んでもらつた髪は日本髪よりも不衛生で、これをとても新時代と讚美する氣にはなれないと嫌悪感を示している。

また、三宅氏はモダン・ガールについて「私の知つて居るモダン・ガール」と題して次のように述べている。

つまり、此頃聲を大きくして云はれてゐるところのモダン・ガールと云ふものは、最初こそ、変わり咲きの花を珍しがるようにもてはやされたものだが、それは時代につれて変わつて来る風俗なり、習慣なり、或は心持の赴き方を一歩先きに表現した少数の婦人の事である。早晩凡ての新時代の女の、赴く方向だつたのだと解釈する事も

出来よう⁶⁶。

と三宅氏は考えており、続けざまに「だから、今ではもう、特別に珍しいものもなくなつていはゞ、此頃の女の人の傾向を表現するものに過ぎない」⁶⁷。としている。また、三宅氏は次のようにもいふ。

其意味で今の妙齡（としごろ）の娘達は、皆屈強のモダン・ガールであり、一見何の氣もなく、洋服でかけまはつて居る少女達の、思想なり、言動なりを、よく注意して見ると、まぎれもない生粋のモダン・ガールである⁶⁸。

その後の文では「彼女等は、自分の思ふことを決してまげはしないのだから、中年以上の人の力で、どうとめて見ようとしたつて、「古いわね」で片付けられるに決まつてゐる。」⁶⁹と述べており、モダン・ガールな彼女たちをどうしても止めることはできないと考えを表した。

これまで三人の批評をみてきて、モダン・ガールがする行動等にやや批判的な意見もあつたが、モダン・ガールというのは、先進的なイメージがあるが、見た目だけではなく、彼女たちの思想や言動を含めて、古い価値観から解放された女性を称してモダン・ガールと呼んでいたことがわかつた。

次にモダン・ガールのイメージを文学作品からみていきたいと思う。こちらは青木淳子氏の「都市空間におけるモダンガール・ファッションを視点として」（『語学教育研究論叢』三十三、七五〜九〇、二〇一六年、大東文化大学語学研究所）の内容を参考にする。

大正十二年（一九二二）九月一日に起きた関東大震災は関東地方に甚大な被害を及ぼした。震災の翌日、第二次山本権兵衛内閣が成立し、内務大臣後藤新平は東京復興の基本方針を「帝都復興の議」として提唱した。このような政策を背景に東京は帝都として形成されていく。その過程で銀座は享楽と消費の場として、丸の内はモダン・ガールの働く場所として当時の小説にファッションの表現と絡められながら記述されていく⁷⁰。

大正十五年（一九二六）五月九日の銀座街頭での服装に関する調査によると、行人の女性の洋服の割合は1パーセントに過ぎなかつたそうである⁷¹。この調査の主導者だつた今和次郎は当時の銀座を次のように記述している。

銀座―首都の心臓、時代レビュウの焦点。夜尾張町の角に立つて街上風景を見る、聞く。―電車のスパーク、自動車の警笛。オートバイの爆音。(中略)和服に断髪、ドンファン風のハンドバック、膝までのスカート、脚、脚、(中略)ダンスガール、ストリートガール、マッチガール、喫茶ガール。どこから流れてくる蓄音機のリズムに合して唄うモボモガの一团

(今和次郎「懐古恋想銀座柳」昭和四年(一九二九)中央公論社)

ここでは銀座街頭の夜の様子をイメージできるだろう。ここで一つ説明を付け加えるとすれば、モボ、モガというのはモダン・ボーイとモダン・ガールの略である。モダン・ガールの外見的特徴が断髪・洋装とするならば、モダン・ボーイはちよび髭に、ラップズボン(裾が広がったラッパのような形をしているズボン)、ステッキなどの装いが特徴である⁷²。夜の銀座が上記の様子だと、昼の銀座はどうだろうか。次に昼間の銀座の光景をみていきたい。

A 洋書店のショウ・ウィンドウが半分見える。その隣がQ時計店。Y食料品店。三、四軒離れたところに婦人洋服屋のカンス。その前に立つて男が二人。一人はステッキに身体をもたせて、マヌカンに着せた婦人服を見ている。

(伊藤整「M百貨店」『新科学的文芸』昭和六年(一九三二)五月号)

一人の男がステッキを持っているということはモダン・ボーイだろうか。昼間の銀座は夜の銀座と違って少し落ち着いた印象である。

そして、人々がお洒落をするために集う場所としての銀座には次のように表現されている。

二階のビュティ・パーラーの髪の焼ける臭気とコテのかみあう響と、シャンプーする水の流れる音に交錯した。

(吉行エイスケ「女百貨店」初出『近代生活』昭和五年(一九三〇)二月号)

ここでは、文章からにおいや音が鮮明に伝わってくる。お洒落をする街として機能する銀座の姿がよく伺える。

銀座の次にモダン・ガールが働く場所としての丸の内をみていく。東京の丸の内を象徴するオフィスビルとして、丸の内ビルディング、

通称丸ビルがある。丸ビルは奇跡的に大震災の被害を免れた。そしてこれはまた後ほど紹介するが、丸ビルで働くモダン・ガールが昭和二年(一九二七)に「不品行」な行いにより新聞沙汰にもなっている。

丸の内には銀行や一流企業が軒を連ねていた。このオフィス街の様子がわかる小説は次の通りである。

太田ミサ子の黒いスカートが冷たい路上で地下の電光に白く煌いた。彼女の横顔が官街と銀行と、店舗の立ち並んだ中央街の支那ホテルのまえまでくるとふるえた。

(吉行エイスケ「女百貨店」初出『近代生活』昭和五年二月号)

ここから丸の内の街の様子がよくわかる。ここでも「黒いスカート」と服装の表現が含まれている。

また、都市空間だけでなく、モダン・ガールがどういう人物なのか事細かく説明されている文学作品も青木氏は紹介している。

当時富裕層から職業婦人まで様々な階層に「モダンガール」と標榜される人物が存在していた。それがわかる文章は次の通りである。

さて時代は千九百二十七年の午後二時半、…一台の自動車丸ビル北側口に停まりました。中から現れましたのがオレンジ好みの洋傘の御令嬢、首には真珠の首飾り、左手首には銀の腕輪が二つ嵌められている。服装といい、装身具といい、肉付き顔立ちといい、およそ金持ちモガと察せられます。

(今和次郎・吉田謙吉『モデルノロジオ考現学』春陽堂、昭和五年八月)

ここでは「金持ちモガ」の身につけているアクセサリーや傘の詳細が詳しく書かれている。それとは対照的な職業婦人であるモダン・ガールの様子がわかる文章が次の通りである。

夜の一時、新宿のプラットホームに三人の女が立っていた。モダンな令嬢風の服装ではある。口唇の濃い、一人は断髪でホームの印象はこの三人を中心としていた。

(浅原六朗「省線リレー風景 深夜の乗客その他」『近代生活』昭和四年(一九二九)八月)

ここでわかることは「金持ちモガ」では、「御令嬢」とはつきり書かれているが、「職業婦人のモダン・ガール」では「令嬢風」と書かれて

近代女性の洋装化とファッションからみるその生き方



図5 「モダン・ガール恐怖時代来る」東京日日新聞 1927年4月20日 11面

通勤するタイピスト、女事務員等職業婦人の素行調査に着手し、不良少年係篠原、石澤両刑事が主となって内偵中のところ、驚くべき風紀退廃の事実が続々発覚、丸ビル内日本タイプライター会社のタイピスト牛込区左内町海野まつ子(二)府下滝野川町中里大原きみ(二〇)以上仮名、郵船ビル内内国通運会

社員某外数名の若い男女を召喚し、後藤警部が嚴重取調中で、二十日には四谷方面から機械商某を召喚するほか、引き続き探査の手を広げることになった⁷⁴。

最初の文の「モダンガール征伐」とは東京鉄道局のモダン・ガールの取り締まりの記事のタイトルであり、この記事は右の記事の五日前に出されたものである。

「モダンガール征伐」の内容に少し触れると、「月給に見合わない高価な服装をしたモダン・ガールが、出勤よりも、欠勤の方が多く、役所の廊下を銀座通りだと思っているのか、勤務時間なのに着物を見せるために散歩するものも少なくなく、化粧室の鏡の前には長く立つべからずと幾度も張り紙を出しても、誰かにはがされていて、退所時間三十分前からモダン・ガールが群がっている始末」⁷⁵(図6参照)と、東京鉄道局で働くモダン・ガールの不品行さを報じている。この頃、特にモダン・ガールが多い職場は東京鉄道局であった。

いる。たとえ令嬢風であっても夜中の一時に新宿駅から乗車するのはカフェで働く婦人であった。時間帯にも注目すると、たしかに「金持ちモガ」は昼下がり、「職業婦人のモダン・ガール」は深夜である。

この時期、流行した洋服のデザインは直線的で、衣服製作も容易であった。女性雑誌にはワンピース等の型紙が掲載されていることもあり、裁縫ができれば、自分で着なくなった着物の布などで洋服に作り変えることができた。

このような状況が、「洋装のモダンガール」の存在を広い層に渡って可能にしたといえると、青木氏は述べている⁷³。

先に、丸ビルで働くモダン・ガールが新聞沙汰になったと述べたが、次に新聞記事が報じるモダン・ガールについて述べていきたい。

昭和二年(一九二七)四月二十日の東京日日新聞に「モダン・ガール恐怖時代来る オフィスから続々警視庁へ引致さる」という記事が掲載された。その内容は次の通りである。

東京鉄道局がモダンガール征伐に着手した前後から、警視庁刑事部でも丸ビルをはじめ新東京のオフィス街、郵船、海上、三菱ビル等に

社員某外数名の若い男女を召喚し、後藤警部が嚴重取調中で、二十日には四谷方面から機械商某を召喚するほか、引き続き探査の手を広げることになった⁷⁴。

(図5参照)

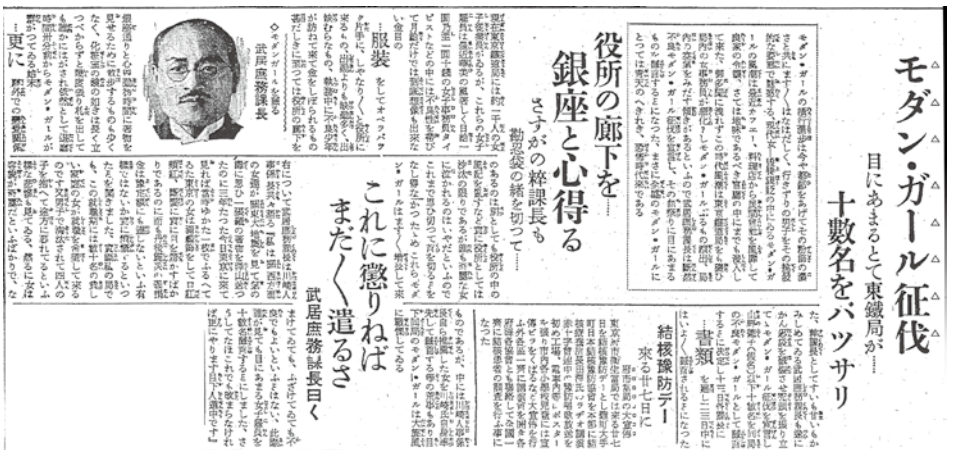


図6 「モダン・ガール征伐」東京日日新聞 1927年4月15日 11面

ここで話を「モダン・ガール恐怖時代来る」の記事の内容に戻したいと思う。この記事には続きがあり、「宛らの悪魔小説 丸ビルを恋愛市場に」というタイトルがつけられている。その内容は次の通りである。

前記数名の取り調べ内容を聞くと、いずれも丸ビルを恋愛市場に見立て、付近の各ビルディングから集まってくる会社員とタイピスト、女事務員が、昼の休憩時間に地下室食堂で一杯のコーヒーに甘い恋をささやき、帰宅時間になると示し合わせて大森方面の料理旅館や市内の待合に出没するというのである。その結果、避妊、墮胎等の暗い罪がさもされ、今後の調べで意外な事実が発覚するやもしれぬ形勢である。右につき後藤警部は概嘆して語る。「モダンガールと称する女の貞操観念が著しく腐敗、墜落しているのに驚いた。今までもそういう噂は聞いていたが、的確な事実には貧しかった。しかるに今後の取調べによって具体的な事実が続出し、その内容は谷崎潤一郎氏が好んで書くところの作品に出る女以上のものばかりである。こうした男女の交渉は親にとって特に注意すべき大きな問題で、取調べ終了次第、事実を社会に発表し、反省と注意を促す考えだ⁷⁶。(図5参照)

というように、モダン・ガールの貞操観念に目をつけられ、全体的にみればモダン・ガールに対していい印象を持てる記事がない。

新聞ではモダン・ガールの不品行な行いがベースとして報じられているが、新聞以外の証言はどうだろうか。次にみていこうとおもう。先に紹介した三宅やす子の『愛の讚美』（教文社、昭和三年（一九二八）では「丸ビルの女」について触れている。

丸ビルの女、といふものが新時代の女性の代名詞であるなら、女性の内容は、髪のかたちとお化粧で定められるわけになる。事実、丸ビルの女には、首から上だけ、不調和におしゃれをした女性が多い。云ひかへればよそゆきの顔と頭で、ふだん着をきて居るような感じである⁷⁷。

しかし、次の証言ではどうやら食い違いが生じる。

こちらも先に紹介した村上信彦の『大正期の職業婦人』（ドメス出版、一九八三年十一月十五日）に掲載されているインタビュで昭和四年（一九二九）に丸の内の八重州ビルに勤務していた鳥井静子という女性の証言がある。また、彼女の友人は丸ビルの商事会社に勤めており、自

分自身の体験と友人の観察から次のように語っている。

当時丸ビルといえればおしゃれの本場のように騒がれていたが、私はなぜあんなひどいことを言うのか分かりませんでした。友人にしてもキモノに事務服を着てほとんど化粧をせず、質素で地味だったし、丸の内一帯の風俗にしてもほとんど世間と変わりありませんでした。なぜなら私たちはみんな、親のためとか兄弟が多いためとか、家のために働いていたからです⁷⁸。

また、世間の人々に対しては次のように述べている。

丸ビルの商事会社で、事務服を着て、化粧もせずに親兄弟のため働く娘たちを、さも軽薄な女のように評判するのをみて、酷いことを言うなと思った⁷⁹。

鳥井静子氏の証言が事実であれば新聞が報じていたことは大げさにしていたのか、あるいは、デタラメだったという風に読み取れるのではないだろうか。

しかし、新聞が職業婦人であるモダン・ガールのことを報じ出したのは、鳥井静子氏が丸の内勤務する二年前のことである。この二年で状況が変わったかどうかは定かではないが、記事によると一九二七年の時点では、他の会社で取り締まりがされていたかはわからないが、東京鉄道局では派手な装いへの取り締まりがされていたようである⁸⁰。

二年で状況が変わったという説が正しければ、新聞が報じた「モダン・ガールの不品行な行い」が世間の人々に浸透してしまい、二年経っても残り続けていたということになるのではないだろうか。

モダン・ガールというのはさまざまな階級の人に存在していたというのは間違いないだろう。

例えば、博士夫人の福島慶子（図7）は、取材に来た記者の前で、およそ奥様らしからぬ態度で煙草を吸っていた⁸¹。



図7 福島慶子(左)とその子供(右)
(国立国会図書館所蔵)

令嬢の河合治子(図8)は、京都の国際会議場で外国語を話し、着飾った他の令嬢とは違う存在であることを周囲の人々に印象づける⁸⁰。富裕階級の令嬢や夫人達は、その父親や夫の従属的立場にあったが、先進的で近代的な精神を持った家庭であった場合、洋装を多く着用し、さらに、モダン・ガールと周囲から言われる人もいた⁸¹。

この時代、モダン・ガールとして公私共に認められていたのが作家の佐々木房子(のちの佐々木房)という女性である。彼女のモダン・ガールぶりについては一部雑誌によつて明らかにされている。青山学院卒業後、ローマで開催された世界婦人参政権大会に首席している。西洋の思想を身に付けファッションを着こなす彼女はしばしば、雑誌の取材を受け、そのモダン・ガールぶりが世間に知れ渡った。図9は自宅の居間で当時、まだ珍しかったソファーに座り、コナン・ドイルを読む佐々木房子である。作家として社会的に名声を得、モラルにとらわれない生き方をしたことが、モダン・ガールといわれた根拠であった⁸⁴。

以上のように、富裕層のモダン・ガールを紹介してきたが、彼女たちのようなモダン・ガールが理想に近い形であった。その一方で当時批判的に見られていたのが、先に紹介した一般人から構成される職業婦人であるモダン・ガールであったということになる。

最後に、モダン・ガールという存在は、古い価値観にとらわれることなく、思想や言動、行動を自由に体現でき、新しい価値観を持つていて、さらにそれを外見の要素、つまりファッションにも取り込んだ女性を指す言葉と考えてもいいのではないかと思つた。



図9 佐々木房子 注81 論文より引用



図8 河合治子

一言にモダン・ガールといっても、世間から見れば、理想的なモガと、批判的に見られるモガがいるが、どちらも退廃的な文化であることはまぎれもない事実である。だが、新しい価値観をもって生きるには、もともと内に秘められている思いがないと実現できない、つまり、モダン・ガールになることはできなかったと考えてもいいだろう。

おわりに

これまで日本人における洋装化のはじまりから、日本人女性における洋装の広まり、さらにファッションを通して女性の生き方をみてきた。第一章では、洋装化のはじまりをみてきたが、ポルトガル商船が種子島に漂着し、鉄砲の伝来とともに、乗組員の西洋人が着ていた服を日本人が目にした瞬間から、洋装化がはじまったといつてもいいだろう。そこから洋装文化はとどまることなく、天正の頃には諸大名の間で南蛮の服を真似ることが流行し、享保以降は蘭学者の間で実用性を重視した上で洋服を着用していたことも分かり、さらにペリー来航以降は西洋との先進性のギャップを日本が感じ、丁髷、戦道具だけでなく、服装においても、政治的な理由から男性が主となるが、洋服を着用するようになった。一方で女性は、皇太后・皇后が眉墨、お歯黒をやめ、こちらも政府主導のもと、眉を剃り落とし、お歯黒をつける習慣は廃止された。しかし、衣服は簡単に変わることがなかった。女性と洋装において関わりがあるので鹿鳴館洋装が挙げられるが、高価なドレスは一部の上流階級の女性だけにとどまり、一般の女性に広まることはなかった。

第二章では、女性における洋装の広まりをみてきた。女性に関しては、服装そのものが洋風になるといっても、髪型が洋風に移り変わるといふことの方がはやくあったようだ。明治十八年(一八八五)の婦人束髪会発足により、都会から地方都市まで束髪が広まった。それは今までの日本髪は不便、不経済、不衛生であったというのが決定的理由である。また、束髪は自分で簡単に結えるのでいろいろなアレンジができたというのも今まではないポイントとなるのではないだろうか。髪型が洋風に移り変わったところまではいいが、女性の衣服が洋装に変わるきっかけを見つ

るために、第二章では女性雑誌が女性の衣服に対して、どのような役割を持っていたのか着目した。明治末から大正初期はどの雑誌も、和服改良案（和服を活動的な洋服に仕立てる等）を推奨しており、当世人気のあった『婦人世界』の衣服を特集した臨時増刊号『衣裳かゞみ』（明治四十年（一九〇七））でも洋服のほうが活動的であると認めてはいるが、日本家屋や体格が洋服に適さないから和服のほうが良いとしている。このことから当時の環境を考えてみると、西洋建築というよりも、日本家屋のほうが圧倒的な数であったから、周りの環境に馴染めないというのと、そもそも日本人の体格に見合わないので、おすすみができなかったということである。しかし、大正八年（一九一九）くらいになると、洋装化への提案が積極的になされていくようになる。『婦人世界』でも日本髪と同じように、不経済で手入れに手間がかかることを指摘した。この時期の欧米では、ガードルやブラジャーが発明されており、女性たちの服装がさらに進化され、活動しやすい膝下丈のシヨート・スカートを穿くようになっていた。しかし日本では、女性の洋装着用者は教員などに限られ、まだ、一般には普及しなかった。それには決定的な理由とは限らないが、米国生活を長く経験し家族は皆洋服を着ることにしているという医者の中林正巳の話によると、妻が洋服を着て買い物に出かけた際、近所の子供たちに珍しがられ、「洋妾」と言われてしまったことから、やはり、洋服があまり普及していない時期に一般の女性が洋服を着て外出すると、周りの環境が洋服についてきていない所為で、好奇心な目で見られてしまうというのがよくわかる。特に子供は思ったことをすぐに口に出してしまう傾向にあるので、中林氏の話としては「洋妾」と言われてしまっているが、恐らく大人ですら、街で洋装の女性を見かけたら、思わず振り向いてしまったのではないだろうか。現代の感覚で例えるならば、大げさな表現だが、普通の街中で着ぐるみを着た人とすれ違うようなものではないだろうかと思う。

さて、話を雑誌の役割に戻すが、雑誌の読者として『婦人世界』においてではあるが、中核層は職業婦人や女学生であり、女工がその周辺の読者として存在していたようだ。しかし、中林氏の妻が体験したような理由が原因で一般女性に洋装が普及することがなかったのではないだろうか。関東大震災以降は洋服、洋風下着を用いる女性を多少増加させたが、

これまでの長い習慣によりすぐにみなが着用するまでには至らなかった。女性の洋服が普及し、定着していくのは、職業婦人の増加に伴っていくのではないだろうかというのが、第二章の結論である。

第三章はファッションを通して当時の女性の生き方をみたいと思ひ、具体的に職業婦人とモダン・ガールを題材とした。

まず、明治期の職業婦人は一般的にみると、女性が外に出て働くこと自体があまり良い印象ではなく、女性は家で働くのが当たり前という考えの世の中であつたため、偏見や避難が飛び交い、この時期の職業婦人はまさに茨の道を通らなければならなかった。しかし、大正期になると、かつては特殊だった女性の就職者数が増加し、社会的に無視でなくなつた。新聞や雑誌が女性の職業を取り上げるようになり、女性が職に就く正しい一つの生き方というように世間が少しずつ認識するようになっていった。

実際当時、デパートで働く職業婦人の事例として、大正五年（一九一六）より松坂屋で勤務していた荒井直子という女性をとりあげた。

デパートといえば、洋服や化粧品が売っていて華やかな印象があり、そこで働く女性もさらびやかなイメージをどうしてもしてしまいがちだが、荒井直子氏の証言によると過酷な労働状況だったようである。

一日中立ち仕事で、交代時間がなく、トイレにいく時が唯一の休憩だった。夏は屋上でのイベントで就業時間が午後十時になることもあった。

と証言しており、休みも少なくお洒落をする時間もなかったのではないだろうか。基本的な出勤スタイルは着物で安価で生地が丈夫な銘仙などを着用していたようだ。

モダン・ガールにおいては、お金持ちの令嬢から職業婦人まで、さまざまな階級の人たちが存在していたようだ。世間的にみると、令嬢などの上流階級のモダン・ガールが理想的な形で、職業婦人であるモダン・ガールは新聞の報じた「不品行」な行いが人々に根付いてしまい、そのイメージが残ってしまったので、あまりいい印象がないのである。両者とも、「自由で新しい価値観を持って生きる女性」までは同じだが、職業婦人であるモダン・ガールには、「不品行」さがついてきたということになる。

近代女性の洋装化とファッションからみるその生き方

モダン・ガールは、思想や言動、行動が先進的で、さらに自分のファッションにも先進性を取り入れており、古い価値観にとらわれず、強く生きる女性の意思表示から出来上がった存在なのではないだろうかと思つた。私は「ファッション」というものは自分という存在を自由に表現できるひとつの選択肢だと思つており、また、断髪をして洋装に身を包んだ彼女たちも、自分という存在を「ファッション」を通して表現していたのではないかと考える。

今後の課題としては、ファッションをテーマにすると、東京といった都心に目がいってしまいがちなので、地方にも目を向けてみて変わった見方をしてみたい。

注

- 1 横山敏司ほか著『日本洋服史』第一巻(日本図書センター、二〇一一年)一七〇～一八頁
- 2 前掲注1 一九頁
- 3 前掲注1 二〇頁
- 4 前掲注1 二四～二五頁
- 5 前掲注1 二八～二九頁
- 6 刑部芳則著『明治国家の服制と華族』(吉川弘文館、二〇一二年)二二～二四頁
- 7 坂本佳鶴恵著『洋装化と女性雑誌・戦前の関与について』(『お茶の水女子大学人文科学研究』六、お茶の水女子大学、二〇一〇年)一二四頁
- 8 前掲注7
- 9 前掲注1 八二頁
- 10 柳洋子著『ファッション文化と社会史―ハイカラからモダンまで―』(ぎょうせい、一九八二年)
- 11 前掲注10
- 12 前掲注10
- 13 前掲注10
- 14 前掲注1 一七九頁
- 15 前掲注1 八七頁
- 16 前掲注1 八三頁
- 17 前掲注14 渡辺鼎著『東髪案内』(女学雑誌社、一八八七年)
- 18 前掲注1 八四頁
- 19 前掲注7 一二五頁
- 20 中山千代著『日本婦人洋装史』(吉川弘文館、一九八七年)二二九頁
- 21 前掲注20 二九一～二九二頁
- 22 『家庭の友』(明治三六年(一九〇三)七月)一一九頁
- 23 『婦人世界』(明治四〇年(一九〇七)一月)六～七頁
- 24 『婦女界』第一巻、第一号(東京同文館、明治四三年(一九一〇)三月一日)
- 25 前掲注7 一二七頁
- 26 『婦人世界』(大正八年(一九一九)六月)七九頁
- 27 前掲注25
- 28 前掲注7 一二七～一二八頁
- 29 『婦人世界』(大正八年(一九一九)四月)六一頁
- 30 永嶺重敏著『雑誌と読者の近代』(日本エディタースクール出版部、一九九七年)一七三頁
- 31 『社会政策時報』五号(一九一一年、一月)七九～八三頁。前掲注30、一七六頁
- 32 石田あゆむ著『大正期婦人雑誌における女性・消費のイメージの変遷―『婦人世界』を中心に―』(『京都社会学年報』九号、五五～七四、京都大学文学部社会学研究室、二〇〇一年)五九頁
- 33 『婦人くらぶ』第一巻、第一号(講談社、太田桐夫編、大正九年(一九二〇)一月一日)一〇七～一〇八頁
- 34 前掲注33 一〇八頁
- 35 前掲注33 二二三～二三五頁
- 36 前掲注1 一二七頁
- 37 大正一二年(一九二三)九月九日付大阪朝日新聞朝刊七面/朝日新

- 38 間デジタル「三万八千人の焼死体／関東大震災（六）」
前掲注1 二二八頁
- 39 前掲注38
- 40 東京消防署HP「デパート火災余談」tdmetro.tokyo.jp
- 41 村上信彦著『大正期の職業婦人』（ドメス出版、一九八三年）二二頁
- 42 前掲注41 二二頁
- 43 前掲注41 二〇五頁
- 44 前掲注41 二〇五～二〇六頁
- 45 前掲注41 二〇六～二〇八頁
- 46 前掲注41 二〇八～二〇九頁
- 47 前掲注41 二一八～二一九頁
- 48 前掲注41 二二〇頁
- 49 世界大百科事典「マルセル・ウエーブ」の言及
- 50 前掲注41 二二二頁
- 51 前掲注41 二二二頁
- 52 前掲注20 三八五頁
- 53 前掲注20 三八六頁
- 54 安蔵裕子・小泉真貴子著「モダン・ガール」にみる服飾文化
『学苑』近代文化研究所紀要八一五、九八～一一五、二〇〇八年）
一〇一頁
- 55 前掲注54 一〇一～一〇二頁
- 56 前掲注54 一〇三頁 北澤秀一著「モダン・ガール」『女性』第
六卷第二号、一九二四年、八月号）二七七頁
- 57 前掲注56 二二三頁
- 58 前掲注54 一〇四頁 平塚らいてう著「かくあるべきモダンガール」
（『婦人公論』一九二七年、六月号）三〇頁
- 59 前掲注58 三二頁
- 60 前掲注58 二八頁
- 61 『日本人名大辞典』
- 62 三宅やす子著『愛の讚美』（教文社、一九二八年）一～二頁
- 63 前掲注62 二頁
- 64 前掲注62 二～三頁
- 65 前掲注62 三頁
- 66 前掲注62 二四六頁
- 67 前掲注66
- 68 前掲注62 二四七頁
- 69 前掲注68
- 70 青木淳子著「都市空間におけるモダンガール…ファッションを視点
として」『語学教育研究論叢』三三、七五～九〇、二〇一六年、大東
文化大学語学研究所）七七頁
- 71 前掲注70 今和次郎・吉田謙吉著『モデルノロジオ・考現学』（春陽堂、
昭和五年（一九三〇）八月）二四頁
- 72 日本国語大辞典「モダンボーイ」
- 73 前掲注70 八三頁
- 74 「モダン・ガール恐怖時代来る オフィスから続々警視庁へ引致さ
る」昭和二年（一九二七）四月二〇日 東京日日新聞
- 75 「モダン・ガール征伐」目にあまると東鉄局が…十数名をバツ
サリ」昭和二年（一九二七）四月一日 東京日日新聞／前掲54
一〇六頁
- 76 前掲注74
- 77 前掲注65
- 78 村上信彦著『大正期の職業婦人』（ドメス出版、一九八三年）一四二頁
- 79 前掲注78 二二三頁
- 80 「鉄道モガに袴着用のお布令」昭和二年（一九二七）八月／前掲注54
一〇六頁
- 81 『婦人グラフ』大正一五年（一九二六）六月号／青木淳子著「モダ
ンガールのファッション―大正末から昭和初期の洋装化の過程にみ
る」『国際服飾学会誌』一六、一九九九年）八〇頁
- 82 『婦人画報』昭和五年（一九三〇）一月号、二二二頁／前掲注81
- 83 前掲注81
- 84 前掲注81